

イギリスの書評文化（1）：文化としての書評

Reviewing the review (1): Book Reviews as English Culture

楚 輪 松 人

Matsuto SOWA

「何のために本を出版するんです？」私は訊ねた。
「そりゃ、売るためにですよ。すぐ後に続いて出る書評の付いた本ほど売れるものはありません」
— ゴールドスミス『世界市民』(1761) 書簡 51

はじめに

イギリスの書評は「ホマチ仕事」ではない。イギリスの文化としての書評、その書評ジャーナリズムの重要性を我が国で最初に力説したのは、文芸評論家の故篠田一士氏（1927-1989；以下、篠田と略記）であった。篠田は季刊文芸誌『聲』に掲載していたエッセイのなかで、1958年当時、ロンドンの文壇で活躍していた書評家たち — レイモンド・モーティマー、シ ril・コナリー、ハロルド・ニコルソン、フィリップ・トインビー、V. S. プリッチェット、ウィリアム・エンプソン、フランク・カーモードなど — の名を挙げて次のように言っていた。

ここに登場する批評家は書評をホマチ仕事とは決して考えていない。分量、内容、さらに稿料の点からいっても日本の書評の場合をはるかに上廻り、批評家の方も毎週書く批評を彼らの批評活動の正面にすえているのだ。だから、T. L. S. の

巻頭、あるいは中間エッセイと同じく、こうした書評をあつめて一本にまとめることが習慣になっており、当然、そうした書評集が今日のイギリス批評を代表する主要作品というわけである。（篠田、「T. L. S. その他」23）

事実、篠田の言うとおりに、1962年から1973年までの12年間、『タイムズ文芸附録』から選りすぐられたエッセイと書評が *Essays and Reviews from the Times Literary Supplement* と題して、毎年のようにオックスフォード大学出版局から刊行されていた。が、この慣行は今ではすっかり途絶えてしまった。果たして、エッセイと書評にとって、現代は不遇の時代なのであろうか。

篠田は、別の所でもイギリスの書評が日本のそれとはまったくの別物であることを指摘している。再度、レイモンド・モーティマー、ハロルド・ニコルソン、シ ril・コナリーの三人の書評家の名を挙げ、次のように言う。

この三人は毎週、それぞれ週刊誌の常設欄で書評を行うわけであるが、書評といつても、ぼくたちの身近で行われる二、三枚程度の短評ではなく、まず日本の原稿用紙にして十枚から二十枚のスペース

を与えられ、作家論もしくは文学論への展開をふくみにもつような書評を書く。

(篠田,「旅行記について」34)

さらに稿を改めて、日本でイギリスの書評ジャーナリズムが等閑視されていることを篠田は次のように嘆くのである。

日本の外国文学研究家は大変忍耐心が強くて、どんな習練にも敢然と立ち向かうが、残念なことに文学研究はつねにアカデミックで、ストイックでなければならぬという先入観が支配しているために、イギリス週刊誌の書評などは新刊紹介の娯楽版ぐらいにしか考えない。それに書評というとは私たちの身近に多い有名無実の書評を聯想して鼻もひっかけない。

(篠田,「イギリス批評の現状」82)

再三再四の篠田の訴えにもかかわらず、我が国において、イギリスの書評文化、文学と社会を具体的に結びつけるものとしての書評ジャーナリズムはこれまで顧みられることはなかった。イギリスの書評ジャーナリズムがまともに論じられるには21世紀に上梓された『ロンドンで本を読む』(マガジンハウス, 2001年)まで待たなければならなかったのである。この本邦初の試み、丸ごと一冊イギリスの書評を紹介した本の著者こそ丸谷才一氏(本名・根付才一。西暦1952年、かつて篠田らともに機関同人雑誌『秩序』を創刊した小説家・文芸評論家で、2006年11月には文化功労者に選ばれた。1925-;以下、丸谷と略記)である。その本の帯の宣伝文句は次のように言う。

イギリスの書評は知的で面白い読み物だ。読むに値する本の魅力を、普通の読者に向けてすっきり語る。そして読者を本屋さんまで走らせる——そんな見本が41本。世界最高の読書案内

以下の小論の目的は、丸谷の書評論を敷衍しながら、イギリス文学批評において最も本

来的な批評、イギリスの「書評ジャーナリズム」を顕彰しようとするものである。具体的には、イギリスの書評家たち——作家、大学人、ジャーナリスト——の発言を通して、イギリス文化における書評という文芸ジャンルの位置を確認し、「イギリス文学批評」についての以下の発言、丸谷もかつて師事していた大学教授、故平井正徳氏(1911-2005)の発言の真意を明らかにすることである。

きわめて限定された、したがってある意味では純粋に文学的な問題がそこではとり上げられているのである。けれども、同時にそれらはその根底に、より深い、より根本的なしたがってまたある意味で非文学的な問題を内包していることをわれわれは知っている。文学批評は、ある意味で、裏返しにされた文化批評であり、社会批評であることが、イギリス文学批評の一つの特性であると¹いっている。

(平井 491; 下線引用者)

果たして、イギリスの書評は、純文学、批評、ジャーナリズム等々、イギリスの出版文化という広大な地平において、どこに位置を占め、どんな魅力を持っているのだろうか。

1. 書評の過去

イギリスの書評について。まずその歴史を概観してみよう。

書評と書評家が誕生したのはいつのことか。日本におけるイギリスの書評文化論の嚆矢^{こっし}となった書物、『ロンドンで本を読む』の著者は次のように言う。

イギリスの書評ジャーナリズムがいつからはじまったかといふ問題はむづかしい。十八世紀、レーフ・グリフィスがクレランドの『ファニー・ヒル』の大当たりで得た金をつぎこんで「マンズリー・レビュー」を出したところから、と見ること

も可能だし、十九世紀前半の「エディンバラ・リビュー」「ニュー・ステイツマン」「ロンドン・リビュー」からと見てもよからう。このころに書評家といふ職業が生まれ、ゴールドスミスが同時代の文壇を、戦場で戦ふ兵士よりもそれに同行する奴隷、娼婦、商売人などの方が多し、ペルシャ軍に見立てたのは有名な話だ。（丸谷 6）

ゴールドスミスがその時代の文壇を見立てたペルシャ軍という比喻は、J. グロスの『文人の興亡』(*The Rise and Fall of the Man of Letters*, 1969)では次のように続く。「そこでは実際に戦っている兵士の数よりもはるかにまさっていたのが、奴隷、軍隊に同行した非戦闘員（売春婦・洗濯婦・商人など）や取り巻き連中である。プロの作家の台頭と共にプロの批評家の台頭があったわけである。最初に成功した^{レビュー}評論は『マンスリー』と『クリティカル』で、共にジョージ二世の統治[1729-60]に創刊され、18世紀の末までには他の競争相手も戦場での戦闘を開始していた」(Gross 11)。

この「他の競争相手」というのは、当時、雨後の筍のように登場した文芸評論誌である。『小説と読書大衆』(*Fiction and the Reading Public*, 1968)で、作家と読者の間に位置する「中間業者」^{ミドルマン}を論じた章で、Q. D. リーヴィス女史はその時代の文壇を次のように説明する。

当時、雑誌評論によって代表され、維持された高水準の教養があった。1731年創刊の『ジェントルマンズ・マガジン』には、すぐ後に『ロンドン・マガジン』が続いた。1749年、新聞雑誌の歴史において『マンスリー・レビュー』が新生面を切り開き、1756年にはライバル誌の『クリティカル・レビュー』が登場した。同

様に、手強い『エディンバラ』(1802)に対しては、『クォーターリー』(1809)が、特筆すべき『リテラリー・ガゼット』と『ブラックウッズ』(1817)が登場した。(Leavis, Q. D. 142)

英文学の歴史において、書評の効用について、最初に本格的な形で考察を加えたのは、現代小説の革新者ヴァージニア・ウルフ(1882-1941)である。彼女は、晩年(1939年11月2日)に『書評論』と題された第一級のエッセイをパンフレットとして刊行している。「書評無用論」を唱えるこの論考のなかで、ウルフは書評の誕生について次のように説明する。

書評は新聞と共に生まれてきたものであるから、その歴史は短いものである。シェイクスピアの『ハムレット』は書評されなかったし、ミルトンの『失樂園』も同様であった。批評はあったが、それは口コミ(word of mouth)で、劇場で観客が、また居酒屋や個々の仕事場で仲間の作家たちが語った批評であった。活字になった批評(printed criticism)は、恐らく未熟な原始的な形で、十七世紀に生まれた。確かに十八世紀は書評家とその犠牲者の叫ぶ声や野次声で鳴り響いている。(Woolf, Virginia. *Reviewing* 204-05)

ある人物が、このパンフレットが、文学に対して、ジャーナリズムに対して、読者大衆に対して、重大な問題提起をするものである、とその価値を認めた上で、彼女の書評論を補足説明するかのよう「覚書」を付けている。この覚書は、かつては週刊誌『ネーション』の文芸主筆(1923-1930)であり、また1931年以來『ポリティカル・クォーターリー』の編集者の一人として、書評や書評家を相手にする責任を担ってきたジャーナリスト、さらに

また社会批評家としての経験をも有する人物の手に成るだけに信頼に値するものであろう。その人物とは、ヴァージニア・ウルフの夫、レナード・ウルフ（1880-1969）である。レナードによれば、書評というジャーナリズムの出来は、作家を支援するシステムの変更により必然的に生じた社会変革、彼自身の言葉では、「ひとつの革命」(a revolution)に起因するという。少し長くなるがレナードの見解を引用する。

十八世紀、読者大衆のなかで、また職業人として文学に関わる人々の組織のなかで、ひとつの革命が起きた。この革命を生き延びた人物、ゴールドスミスは、その出来事について、生き生きとした描写、そしてその影響についてのすばらしい分析を私たちに残してくれている。読者大衆の途方もない増大があったのである。革命以前、作家は、ごく限られた数の、教養ある、文学趣味のある読者大衆のために執筆し、出版社はそれらを出版していた。作家兼出版人である彼は、経済的に、一人ないしは数人のパトロンに依存し、本は、ごく限られた数の、奢侈しやうしにふける階級のための贅沢品であった。読者大衆の増大は、このシステムを破壊し、別のシステムがそれにとって代わることになった。ここで初めて本当の意味で、「大衆」のために、出版社は経済的に本を出版することが可能になったわけである。つまり、作家に支払う十分な給金も含めて、経費を賄いながら自分の儲けにも十分な数の本を売ることが可能になったのである。これによりパトロンのシステムは抹殺され、パトロンは削除された。もはや十人単位ではなく、千人単位で読まれる廉価本への道が拓かれたのである。もし作家が著述業で生計を立てることを

望むなら、今やパトロンのためにではなく、「大衆」のために書かなければならない。果たして、このシステムの変化が、文学にとって、作家にとって、ほんとうに良かったのか、それとも悪かったのか、という問題は論争の種となる。しかし、ゴールドスミスは、両方のシステムを経験し、世間でも少なくとも一個の「芸術作品」を生み出したと考えられている人物は、新しいシステムに心から賛同している。新しいシステムは、ちょうど近代ジャーナリズムを生み出したように、不可避的に書評家を誕生させた。書評家という存在は、この近代ジャーナリズムにおける限られた小さな一局面に過ぎない。読者の数が増大し、それと同時に、本、作家、出版社の数が増大するにつれて、二つのことが生じたのである。書くことと出版することが競争原理に基づく商売あるいは職業となったこと。そして、莫大な数の読者大衆の一人一人が幾千もの出版物から読むべき本を選択するために、彼らに出版された本の内容と質に関する情報を与える必要が生じたことである。(Woolf, Leonard. "Note" 215-16)

換言すれば、近代ジャーナリズムは、本についての情報を求める読者の要求ニースに応えるべく、その好機を捕らえて書評と書評家を発明したわけである。

ここで特筆すべきは、丸谷、グロス、レナード・ウルフの三人が揃って言及しているオリヴァー・ゴールドスミス（1728-74）という作家である。どうやらイギリスの書評史を語る上で鍵となる人物である。農村の荒廃を謳った詩『寒村行』（1770）や小説『ウェークフィールドの牧師』（1776）で有名なアイルランド生まれの作家であるが、彼が生きた18世紀当時の文壇の状況は、その『ヨーロッパの教養

の現状に関する調査』(An Inquiry into the Present State of Polite Learning in Europe, 1759)や、拙論のエピグラフとしても掲げた『世界市民』(The Citizen of the World, 1762)に詳しい。この時代の文壇に関しては稿を改めて論述したいが、端的に言えば、伝記『オリヴァー・ゴールドスミスの生涯』(1848)を著したジョン・フォスターの次の言葉に尽きるだろう。

パトロンは去り、未だ大衆は現れていなかった。未だに本屋が作家の運命を独占的に支配していた。本屋は近寄りがたい存在——商売に有利な風[貿易風]でも吹く見込みがなければ動かし難い存在だった。(Forster 60-61)

ところで、今年^{サマリード}の夏の読み物の一冊として、オックスフォード市内のブラックウェル書店で平積みになっていたのは、「利用者の手引き」という妙な副題のついた『小説の読み方』(How to Read a Novel: A User's Guide, 2006)という本である。その著者によれば、書評の草創期は次のような状況であった。

現在、私たちが知っているような形の「書評」は、十八世紀初頭の『エディンバラ・レビュー』(自由党機関誌, 1802年創刊)と、これに対立する『クオーターリー・レビュー』(保守党機関誌, 1809年創刊)のような「わいわい騒ぎの居丈高な」('big bow-wow')雑誌と共に始まった。両誌は、書物を国民の知的活力源(the intellectual lifeblood of the nation)とすこぶる真面目に考えた。それから十年後の1817年、「褒めちぎり屋の君」('Prince of Puffers')と綽名された、呼び売り商人のような出版者ヘンリー・コルバーンが、英国で最初の週刊書評誌『リテラリー・ガゼット』を創刊した。『ガゼット』は二つのことをする

ものと意図されていた。コルバーン自身の出版物を褒めちぎること。そして彼のライバル社の出版物をこきおろすことであった。コルバーンは本の販売をすこぶる真剣に考えていた。(Sutherland 214; 下線引用者)

書物を「国民の知的活力源」と考えたという指摘は一見、些細なことのように、しかし実は重大な指摘である。というのは、イギリスの書評ジャーナリズムを考えていく上で、書評こそ、今も昔も変わることなく、一国の文化、あるいは国民の精神の健康状態の維持にとって必要不可欠という考えが書評誕生の頃からあったということは銘記すべきであろう。この点に関しては、後で再び触れることにしたい。

2. 書評の現在

20世紀の書評は、その前身である19世紀の書評と比較して、概して、長さもより短く、内容もより一般的になっていると言われる。『「タイムズ」の歴史』(1939)の編者は、書評の過去と現在を比較して次のように記している。

書評された本は今より数は少なかったが、書評そのものは今より長かった。一冊の小説の書評でさえ二段以上におよんだ。書評が短く区分され、半年、あるいはそれ以上の期間にわたって、十二段以上におよぶ掲載も珍しいことではなかった。とはいうものの、傾向としては、書評はだんだん短くなり、前ほど遅れることはなくなった。(The Times 468)

実際、19世紀の書評は、読者が書評の対象となった著作^{オリジナル}そのものに直接あたる必要がないと感じさせるほど、微に入り細を穿つ、懇切丁寧な書評であった。事実、ヴィクトリア朝英文学についての書評は何ページにもわ

たり、内容もかなり専門である。書評される書物から引用に次ぐ引用がなされ、それらへの評論が続く。長い引用と真面目な評論、これが同時代の書評の実体である。例えば、『イングリッシュ・マガジン』（1831年1月号）に掲載されたアーサー・ハラム（A. H. Hallam, 1811-33）のテニスの『1830年の詩集』に対する書評、ラファエロ前派の機関誌『芽生え』^{ジャーム}の創刊号（1850年1月号）に掲載された W. M. ロセッティ（W. M. Rossetti, 1829-1919）の A. H. クラフの『詩集』に対する書評、『ウェストミンスター・レビュー』（1856年1月号）に掲載された G. エリオット（George Eliot, 1819-80）の R. ブラウニングの『男と女』に対する書評など、堂々たる読み物である。どうしてこれほど懇切丁寧なのか。多くの理由が考えられるが、丸谷の次の指摘は的確である。

当時のこの手の雑誌を見ると、評論はほとんど本の書評といふ形になってゐる。これは当然で、それで用が足りるし、さうしなければ大事な話題を逃すほど単行本中心の文化だつたのだ。雑誌は書物に従属するものとして生まれ、雑誌の主要素は書評だつた。（もちろんこの傾向はそのちもつづく）。ごく最近まで雑誌中心の文化のなかで生きてゐたわれわれは、この様相にとりわけ注目しなければならぬ。（丸谷 6；下線引用者）

続けて、丸谷はイギリスの書評の機能を次のように説明する。

そんな事情で読まれる記事だから、書評はまず本の内容の紹介であつた。どういふことがどんな具合に書いてあるかを上手に伝達し、それを読めば問題の新著を読まなくても一応何とか社会に伍してゆけるのでなくちやならない。ジェイン・オースティンといふいま評判の女の子の

書いた小説は結婚の話だそうですね、やはりあれは大事なことですからな、とか、バイロン氏の『ドン・ジュアン』はじつにふざけたものらしいですな、とか言へるのは紳士貴顕の資格なので、この時間の節約に貢献するといふのは最低の条件だつた。（丸谷 6-7）

そして、懇切丁寧な書評は彼らの「社交的な精神のあらわれ」であると言う。

この場合、著者や彼の主題の背景を客観的に説明する手際のよさは、不可欠の条件だ。読者に恥をかかせず、事態をあっさり呑みこませることはイギリスの書評の習はしで、それは教育的な情熱というよりはむしろ、社交的な精神のあらわれらしい。（丸谷 7）¹⁾

19世紀の書評に比べて、現在の書評が短くなり、内容もより一般的になった理由の第一は、丸谷が指摘するように、20世紀の文化はもはや「単行本中心の文化」ではなくなったということである。事実、「単行本中心の文化」から「雑誌中心の文化」へという媒体の推移^{メディア シフト}はさらに拍車が掛かり、マスメディアが新聞や雑誌などの紙媒体そのものから、テレビやネットなどの映像媒体に移り、情報源がもやはかつてのような一冊の本ではなくなっている。媒体の推移^{メディア シフト}が書評の質的墮落を出来たのだろうか。あるいは書評家が持つべき規範意識、自らが負託を受けた読者大衆の代理人であるという意識を失つたためだろうか。書評家としても名高かったジョージ・オーウェル（1903-50）は、週刊誌『トリビューン』（1946年5月3日号）で、第二次世界大戦後の書評の状況を次のように言っていた。

大多数の書評は、扱っている本に関して不十分か、あるいは誤解を招くような説明しかしていない。戦争以来、出版業者が、編集者に嫌味なことをしたり、出版

するすべての本に対して称賛の勝ち歌を呼び起こしたりすることは以前ほどできなくなったが、一方、スペースがなかったり、その他の不自由なことがあるため、書評の水準は落ちた。こういう結果を見て、解決方法は三文文士から書評を取り上げてしまうに限る、と提案する人も時々いる。(Orwell 217)

オーウェルの嘆きは書評ジャーナリズムそのものに対する嘆きであるが、オーウェル以上にイギリスの文壇全般に対する嘆きをあらわにする人物がいた。ケンブリッジのF. R. リーヴィス(1895-1978)その人である。自らも創刊に加わった文芸評論誌『スクルーティニ』(1932年9月号)に掲載した「文学の不正行為」という題名のエッセイの冒頭に、リーヴィスは、エピグラフとしてハムレットの第一独白からの一節を引用する。「(ああ、厭だ厭だ、まるで雑草が伸び放題の／荒れはてた庭。)むかつく下劣なものだけが／わがもの顔にのさばっている。なんということだ!」(F. R. Leavis, "The Literary Racket" 166; 『ハムレット』第1幕第2場135-7行, 松岡和子訳)。言外の意味は、リーヴィスの見るところ、今日の文壇は伸びるにまかせた雑草だらけの庭、それを独占しているのは品性下劣なものばかり。よもやこんなことになろうとは! というわけである。書評の現況に関しては、「書評が批評とはまったく無縁なものとなり果て、誠実で知的な書評もあるにはあるが、書評の機能は消滅してしまった」と嘆く。その原因は何か。一体、誰が悪いのか。リーヴィスは明快である。作家、出版社、雑誌編集者、書評家たちが「群がる」(get together)ことを覚えてしまい、その「仲間意識」(comradely feeling)が書評そのものを困難にしている、と。リーヴィスによれば、書評はもはや「出版組織のちっぽけな歯車に

差す潤滑油」(Ibid., 168)に過ぎない。

この『スクルーティニ』での嘆きから23年後、再度、リーヴィスは文壇に対する不満をぶちまける。評論『小説家ロレンス』(1955)の巻末のエッセイ「覚書：芸術家であるということ」の最終段落で、今日の文壇を支配し、英国文化振興会によって喧伝されているのは、芸術をもてあそぶ芸術愛好家たちであり、これら非創造的で「社交好き」の似非ディレッタント^{プリティッシュ・カウンスル}芸術家の地位はその社交の人間関係に依存していると言い、結論として次のように指弾する。

彼らが、有閑青年たち(素人もいれば本職もいる)と手を組んで、英国文化振興会、BBC第3放送、新聞雑誌の文芸欄、大学等々の手段を通して完璧な組織を作り、批評が本来果たすべき機能——真の芸術家を識別し、彼を支持し、非創造的な作家をそれにふさわしく位置づけ、かくして批評の基準を維持すること——を、ままと停止させてしまっている。なぜイギリスの文学がこんなにも長い間見るべき新生面をほんんど示さないか、いまさら問うまでもあるまい。(Leavis, "Note" 302; 下線引用者)

果たして、リーヴィスの文壇診断が正しいかどうか、実際に、同時代の文壇が高等遊民たちに占拠されていたのかどうか、批評が本来果たすべき機能を果たしていなかったかどうか、それらは後の時代が判断するところであろう。しかし、何処であろうと文壇には文壇的礼節というものがあり、それがために書評家をしてその機能を発揮することや、書評する本の弱点を冷静に^{てっけつ}別決することを難しくしているといった事態は容易に想像できることである。事実、歯に衣着せぬ書評家は友を失う。『サンデー・タイムズ』の文芸主筆、ジョン・ケアリー(1934-)は、「仲間意識」

よりも「批評が本来果たすべき機能」を優先した書評家である。日刊紙『ガーディアン』（2005年6月4日号、電子版）には次のように記されている。

『サンデー・タイムズ』の文芸手筆として、ケアリーは、30年間近く、率直な言葉で自分の意見を発表してきた。そのため、ある作家は、14年間、彼と口をきかず、別の作家は、パーティの席上でも彼との握手を拒んだ。「友を失うことを恐れてはいけない」とケアリーは言う。「真実は語らなければならない。誰かが愚かなことを言っていると思ったら、それを明らかにすべきだ」。淡緑色の瞳の奥に輝く、買収のきかない清廉潔白さのゆえに、かつてケアリーはテッド・ヒューズとその『シェイクスピアと完全な存在の女神』(*Shakespeare and the Goddess of Complete Being*, 1992) のことで喧嘩をした。ケアリーはその本が「戯言」だと思ったのである。しかし、亡くなる直前にヒューズから受け取った「非常に感動的」な和解の手紙のことを思い出すと、ケアリーは軟化してしまうのである。(Miller, "Relative values")

書評ジャーナリズムが世論に対して発揮する広く直接的な影響力、批評として本来果たすべき機能、リーヴィスの言葉で言えば、「真の芸術家を識別し、彼を支持し、非創造的な作家をそれにふさわしく位置づけ、かくして批評の基準を維持すること」のためのケアリーの態度は潔さと意志の強さを感じさせる。繰り返して言えば、書評家は負託を受けた読者大衆の代理人として、単に経済的關係、個人の利益、党派の利害に左右されるべきでないのである。

しかし、ケアリーは例外的存在かもしれない。事実、現代の書評は、褒め言葉か、ある

いは曖昧な二枚舌のいずれかに満ちている。褒め言葉の多用は、書評に対する読者の信頼を失わせ、書評の価値を下げることになる。また、書評家の曖昧な言葉、賞揚し肯定しながら、しかし同時に攻撃し否認するという「両賭け」("hedge," Woolf, Virginia. 208; "Hedging bets," Cunningham 36) は、書評を紋切り型の単純なものにする恐れがある。この書評の機能不全に対して、丸谷は次のように言う。

書評は読者を本屋まで走らせなければならない。もちろん駄目な本を褒めるのは単なる嘘だけれど、しかしわれわれの国では、いい本だと思ひながら勿体ぶつた口調で遠慮がちにしか言はない書評が多すぎるし、はつきりと褒めるイギリスでも効果的に絶賛する書評はすくない。(丸谷 61)

思えば、かつての書評家の権威は絶大であった。出版業界に詳しい歴史家が教えてくれるのは、書評家の信じがたい影響力である。

アーノルド・ベネットは、そのペンの一振りで初版本を完売させたと考えられていたし、長らく『サンデー・タイムズ』の文芸主筆であったシリル・コナリーは、文壇の大立者特有の文章で、作家の名声の創造も破壊も意のままであった。(Taylor, "Beware")

アーノルド・ベネットとは、W. E. フォースター (William Edward Forster, 1818-86) の1870年の初等教育法 (Elementary Education Act) の導入によって大量に誕生した読者大衆、すなわち同時代の公立小学校の卒業生のための読書情報、その必読書についての指針 (定価まで書き添える本式の書評) を著して、350余りの「必読書」を一所に整列させた『文学趣味—その養成法—』(*Literary Taste: How to Form It, with*

Detailed Instructions for Collecting a Complete Library of English Literature, 1909)の著者、あのベネット(Arnold Bennett, 1867-1931)である。

今時、ベネットのようなことが可能な書評家はいるのだろうか。『小説の読み方』の著者もアーノルド・ベネットの威力に言及して次のように言う。

1930年代、当時の『イーヴニング・スタンダード』の文芸主筆アーノルド・ベネットは、好意的な書評で新刊の小説を完売させることができたと言われている。現在、イギリスでもアメリカでも、それほど力を持つ書評家は一人としていない(唯一の候補は『サンデー・タイムズ』のジョン・ケアリーと『ニューヨーク・タイムズ』のミチコ・カクタニだけだろう)。(Sutherland 216)

なぜ、ジョン・ケアリーとミチコ・カクタニなのか。『小説の読み方』の著者ははっきりとした根拠を述べていないが、『ニューヨーク・タイムズ』のミチコ・カクタニと言えば、ジョン・ケアリー同様、「その影響力や知名度では業界ピカいち、それこそ「泣く子も黙る」存在」と、ネット上(“Who's Michiko Kakutani?”)で紹介されている人物である。このサイトによれば、「ミチコ・カクタニの書評は一言でいうと「辛口」を超える「激辛口」であること、また『ニューヨーク・タイムズ』の最古参のベテランの専属書評家であることや「出版記念パーティーに顔を出したり、編集者と付き合ったりということも一切しない」ことなど、「全米一の影響力を持つ書評家ミチコ・カクタニは謎の日本人女性」であることが特筆されている。ケアリー同様、カクタニも書評家としての潔さによって読者大衆の信頼を勝ち得ている傑物なのである。

以上のように、書評は、概して、かつての

状態から墮ちてしまったようである。その長期低落傾向は、書評紙面の不足、三文文士による売文行為、文壇内での仲間意識などに起因するものだろう。さらに、文学の「大衆化」に伴い、それに迎合する書評家は規範意識、ヴァージニア・ウルフの言葉で言えば、「卓越した文学についての永遠の基準」(Woolf, Virginia 208)を喪失し、結果的には読者大衆の信用を失ってしまっている。書評家は、今後、ますますその影響力を失い、その末期に近づいているということか。果たして、書評家はジャーナリズムにおける絶滅危惧種なのか。また、書評も、過去の遺物として、ヴァージニア・ウルフがその即刻の廃止を提唱したように、有害無益と見なすべきものなのだろうか。

無論、答は否である。なぜなら市場経済においては、すべて流通品は紹介と評論の対象となり、本という商品を扱う書評ジャーナリズムもその例外ではないからである。さらに、変わることはない書評の本質というものがあ。書評なくしては近代以降の出版文化はあり得ないからである。まず第一に、作家にとって書評は必要不可欠である。レナード・ウルフが指摘していたように、現在の出版システム、すなわち作者→中間業者→読者大衆というシステムが存在する限り、書評の必然性は不変である。作家は、自著を宣伝広告してくれる書評家、読者大衆を読まずにはいられない思いに駆り立てる機関が是非とも必要である。レナード・ウルフは言っていた。「多くの読者大衆や巡回図書館に自分の本を売りたいのであれば、今まで同様、作家は書評家を必要とする」(Woolf, Leonard. 217)と。

第二に、読者にとって、本を取捨選択するためのガイドは必要不可欠である。「読者大衆が望んでいるのは、読む必要のある本に対するある種の指針であり、ある種の評価なの

である」(Orwell 218)。Q. D.リーヴィス女史が『小説と読者大衆』(1968)のなかで言及しているジャーナリストの算定に拠れば、「毎月、新しい小説の言葉として2億語以上が出版されている」(Q. D. Leavis 19)。その大多数は、900の雑誌に掲載された物語という形をとっているが、小説が氾濫していることは今も昔も変わりはない。リーヴィス女史の資料は1930年代の『小説作法の技巧』という書物からの資料(MacNichol 31)であるが、2006年出版の『小説の読み方』の著者、サザランド教授の計算によれば、現在、入手可能な小説のすべてを読むには、一冊の所要時間を3時間として、一週間40時間、年間46週間、一生で50年間の読書が続けたとしても163回の人生が必要になる。「しかもそれはさぞ退屈な人生になるだろう」(Sutherland 1)と、教授は付け加えることを忘れない。サザランド教授の書物は、小説を文芸社会学の観点から捉えた奇抜な小説講義で、小説研究の方法を教える従来の「ハウツーもの」を大きく超えた好著である。その副題に「利用者の手引き」とあるように、教授の本は期せずして丸谷の言う「書評家の重要な責務」、すなわち「本の用途、あるいは実際的な読み方のコツを教へる」(丸谷 95)機能を見事に果たし、読者が避けるべき小説に時間を浪費することを未然に防ぐための方法、その精神を伝授してくれる。「小説は人生の良き一冊となり得る」というのが教授のモットーであるが、そのためのコツは、入手可能な何百万冊という本のなかから、請求された代金にふさわしいものを発見することであると言う。良き一冊と出会うためにも書評は不可欠なのである。

3. 書評の未来

近年、英米の読者の間で流行している、二

つの特筆すべき現象がある。ひとつは読書会の流行、そしてもうひとつ文学の教則本の流行である。まずは読書会について。

今年、日本でも「読書会」を描いた小説の翻訳が立て続けに出版された。アーザル・ナフィーシーの『テヘランでロリータを読む』(市川恵里訳、白水社、2006)[本の帯の宣伝文句は「全米150万部ベストセラー!」]と、カレン・ジョイ・ファウラーの『ジェイン・オースティンの読書会』(矢倉尚子訳、白水社、2006)[同じく「ユーモアと皮肉に満ちた全米ベストセラーの傑作長編!」]である。英米では読書会が大盛況の様相である。この読書会について、『ジェイン・オースティンの読書会』の訳者、矢倉尚子氏は「訳者あとがき」で次のように教えてくれる。

日本で読書会というと、同好の士が集まって外国語の原書や源氏物語などの古典を読み解く、あるいは講師を招いて解説してもらおうといった、一種の勉強会を指すことが多いのではないだろうか。欧米の場合はそれとは違い、むしろ社交サークルに近くて、本書でも登場人物の一人が「そもそも男は読書会なんてしなわよ」と言っているとおり、参加者は圧倒的に女性である。友達どうして始める場合もあるが、初めて会った相手が興味深い人物だと思うと、もっとよく知り合うために「読書会をしない?」と誘うこともある。通常は毎回リーダーを決め、一回に一冊の本を取り上げてディスカッションをする。メンバーの家でコーヒーとケーキをいただきながらというのが多いが、図書館で集まったり、書店が主催するものもある。アメリカではプロの読書会リーダーという職業まであるらしい。ゲーグルで book club を検索すると何と一億一千万件以上、reading group では一

億八千万件以上ヒットするのだから、その隆盛のほどがしのばれようというもの。(矢倉 349-50)

この読書会と連動しているのが、もうひとつの流行、文学の教則本の流行である。

この夏、文学の世界で新しい現象の兆しが見られたと言うのは、『ガーディアン』に時評コラムを担当する小説家・批評家の D. J. テイラーである。2006年10月4日号の記事は、現在、イギリスの国民が読んでいるものについて論じている。興味深いことに、イギリス人は文学の入門書——必読書についての示唆だけでなく、読書の途中で広範囲な解釈上のヒントを提供してくれる、エレガントな教則本——を読んでいるという。これらフィールドワーク的な書物のなかで主だったものが、この拙論でもたびたび登場したサザランド教授の『小説の読み方—利用者の手引き』(2006年8月出版)である。²⁾

そして10月、これに続けとばかりにオックスフォード大学出版局から出版されたのがジョン・マランの『小説の働き方』(John Mullan, *How Novels Work*, 2006)である。また、詩に興味のある読者には、ルース・パデルの『詩の52の見方』(Ruth Padel, *52 Ways of Looking at a Poem*, 2002)がすでに本屋の棚に並んでいるという。これら教則本の特徴は、アプローチの方法は違っても、原理が同じことである。すなわちいずれも大学のゼミ室から借用され、読書大衆というユーザーの使用に供するべく装い新たにされた実践批評の最新版というわけである。事実、21世紀の読書会のメンバーが求めているのは、好きだの嫌いだのといった印象批評を超えた、テキストについての高度な専門的評価である。この現象は、批評眼を持ち、熱意あふれる英米の読者大衆の、文学への新しい興味、文学への新しい敬意の兆しと見な

すべきなのかもしれないが、いずれにせよ、新しい世紀になって大衆向けの文学案内の執筆の要請があったわけである。

読書会の台頭、その参加者をターゲットにした案内書の出版。これらは現代の出版業界では大きな駆動力のひとつとなっている。文学の「大衆化」に伴い、文学談義の場が大学のゼミ室から家庭の居間へと空間移動しているのである。かつて19世紀の新聞雑誌の書評欄に掲載されていた長い「書評」が、再び、巡り巡ってお茶の間に戻ってきたという恰好である。ジョン・サザランド教授(1938-)の肩書きはロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジの近代英文学の名誉教授である。ジョン・マラン(1942-)の肩書きはロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジでイギリス小説を講ずる上級講師シニア・レクチャーであり、彼の『小説の働き方』は、2003年から3年間、『ガーディアン』の「週刊レビュー」に連載された「小説の要素」という名の連続ミニ講義——ペーパーバックで、入手可能な、有名な現代小説をテキストにしての文学の技巧についての講義——がその元になっている。そしてルース・パデル(1946-)もかつてはオックスフォード大学とロンドン大学パークベック・コレッジの講師シクチャーであった詩人で、彼女の『52の詩の見方』は、1999年から2年半、『インディペンデント日曜版』に連載された現代詩についての講義がその元である。

蓋し、最初は新聞の文芸欄に連載され、後に「読書会」のための案内書ガイドとなった本、しかも大学の先生の手になるものには先例がある。バーミンガム大学の英文学講師から小説家・批評家に転向したデイヴィッド・ロッジ(1935-)の『小説の技巧』(*The Art of Fiction*, 1992)も、1991年から『インディペンデント』に連載された記事——ロッジから50回の個人指導チュートリアルを受けているような小説講座

—がその元であるし、またオックスフォード大学のマートン英文学名誉教授のジョン・ケアリー（1934-）の『純粋な楽しみ』(*Pure Pleasure: A Guide to the Twentieth Century's Most Enjoyable Books*, 2000)も、1999年の1年間、『サンデー・タイムズ』に連載された書評がその元であった。但し、サザランド、マラン、パデルの三人が選ぶテキストは、いずれも未だ^{キャンニシティ}正典性を獲得していない現代の作品、未だ評価の定まらない正典予備軍といったテキストを取り上げている点は、印刷されたばかりの新刊書を取り上げる「書評」同然の活動と見なしてよいだろう。思えば、孵化した幼魚が川を下り、成熟して再び生まれ故郷の川へ帰ってくる鮭のように、文学の書評が、新聞・雑誌の文芸欄から大学のゼミ室へ、そして大学のゼミ室から再び新聞・雑誌の文芸欄に掲載されてお茶の間へ帰ってくるには半世紀近くの時間の経過が必要だったわけである。

現在、ロンドンの書評で最も活躍しているのは、いわゆる「ジャーナリスト批評家」ではなく「学者批評家」である。篠田が「イギリス批評の現状」でイギリスの書評について書いた頃から隔世の感がある。当時は、ジャーナリスト批評が全盛（丸谷 3）であった。イーヴリン・ウォー（1903-66）、その生涯を書評と共に過ごしてきた小説家は、生前、「学者批評家」の存在に注目し、評論週刊誌『スペクテイター』で次のように言っていた。1953年7月3日の発言である。

思うに、今日、印刷された形では最良の批評にはお目にかかることはないのではないか。国中、どこに行っても、聡明で、教養ある男女は皆、大学の学生たちに講義しているからである。イギリスの大学が、アメリカの大学のように、「クリエイティブ・ライティング」に学位を与え

ているものかどうかは知らないけれど、私の受け取る手紙から判断すれば、現代の作品について、真面目に吟味し、かつては季刊誌の書評ページを埋めた類の文学談義は、今や学生のボールペンの走り書きのなかに消えてしまっているのである。（Waugh 440）

無論、万人周知の事実として、アンガス・ウィルソン（1913-91）、マルコム・ブラッドベリ（1932-2000）、カズオ・イシグロ（1954-）の存在で有名となったイースト・アングリア大学を始めとして、イギリスの多くの大学でも「創作学科」の修了生に学位を与えている。今となってみれば、ウォーの指摘は、書評の主な書き手が「ジャーナリスト」から「学者批評家」へと^{シフト}推移することへの予言であった。ウォーの予言は的中した。それまで書評ジャーナリズムの屋台骨を支えてきたのはジャーナリスト批評家あるいは作家批評家であったことを考えれば、これは書評ジャーナリズムにおける新しい動向である。事実、イギリスの批評史を振り返れば、T.S. エリオットが「完全な批評家」（1920）その他のエッセイにおいて指摘したように、「創作＝批評」という図式が成り立っていた。換言すれば、イギリス批評史、あるいは文学論史の展開を見るとき、明らかになるのは、「代表的な批評家はいずれも同時にイギリス文学を代表する秀れた創作者であったということである。創作と批評とのみごとな相関関係の示す系譜がイギリス批評史の状況である」（平井 490）というのは、故平井氏の的確な評言であった。しかし、同氏は続けて、次のようにも言っていたのである。批評家としての英文学科の教師たちについての指摘である。炯眼の士、1965年の予言^{いわ}に曰く。

いわゆる英文学科の教師の発表する批評を無視しては現代の文学批評の妥当な評

価と展望はできないであろう。代表的な批評家で、しかし創作者でない人々の出現する傾向が次第に強くなってゆくように思われる。(平井 490-91)

再び、予言は的中した。現在、「学者批評家」の存在を無視してロンドンの書評ジャーナリズムを語ることはできない。「学究」と「ジャーナリスト」というまったく相反する二つの顔——一方では学識と知的生活に対する理解を確かなものとする「大学」の構成員としての顔、他方には迅速を旨とする、容赦のない前進の強行軍である「マスメディア」に生きるジャーナリストとしての顔——を持つ新しいタイプの「書評家」たちである。彼らについては、稿を改めて論述しなければならない。

むすびに

最後に、「共同体としての書評」ということについて。

丸谷は、イギリスには「書評の伝統と文学好きな読者たちによる文学風土」(丸谷 139)が存在すると言う。さらに、書評はその発表の舞台との関係が意外に大きいこと、換言すれば、書評が「共同体的な文学」であること、つまり「書評家、新聞雑誌の編集部、そして読者の三者によって形成される共同体の作品」(丸谷 190)であることを強調する。書評とこの「文学風土」の創造との関連について、D. J. テイラーは次のように言う。

書評は、一冊の本が書評のページから飛び出して、新聞に書評欄があることさえ知らなかった読者の手に収まるようにする風土を創造するうえで今でもきわめて重要な役割を果たしている。(Taylor, "Critical"; 下線引用者)

前述のように、書評の草創期、書物は「国民の知的活力源」"the intellectual lifeblood of the nation" と真剣に考えられていた。

書評をある種の「対話」であるとするオックスフォードのカニングム教授は、その重要性を指摘して「身体健康」という隠喩を用い、社会にとっての書評の意義を説いて止まない。書評を形容するために教授が用いる形容詞の多用は、切迫した勢いさえ感じさせる。英文も併せて引用したい。

書評は、それが一部となっている出版業やジャーナリズムと同様、われわれの文化の知的かつ美的側面を生き生きと保つ、きわめて重要で、継続する対話の一部である。秀ぐれた、公明で、正大で、真面目で、誠実な書評は、われわれの文化の健康にとって、われわれが呼吸する文化の空気にとって、著作それ自体の健康にとって、必要不可欠なのである。

Like the trades of publishing and journalism which it serves, reviewing is part of the vital and continuing dialogue that keeps the intellectual and aesthetic aspects of our culture alive. Good, open, fair, serious, honest reviewing is essential for the health of our culture, for the cultural atmosphere we breathe, for the health of writing itself.

(Cunningham 37; 下線引用者)

身体を流れる「知的活力源/生き血」"the intellectual lifeblood" として、書評は、文化や社会の保健衛生にとって必要不可欠である、というのが教授の書評論の総括である。興味深いのは、テイラー、サザランド、カニングムの三人が三人揃って、書評の重要性を説明するのに「生命」のイメージを用いていることである。これは「社会に背を向けずに本を読むイギリス人の生き方」(丸谷 5) と言うだけでは足りないレベルの本の読み方である。先に引用した平井教授が「文学批評は、

ある意味で、裏返しにされた文化批評であり、社会批評であることが、イギリス文学批評の一つの特性である」(平井 491)と言えるのも、イギリス文学批評においては、書評ジャーナリズムこそがその主たる形成要因であり、読者大衆は書評という時事的な問題の報道・報道・解説を読んで、文学に偏せずにイギリス文学の基盤としての社会、その時事的な問題を論じてきたからである。その意味で、「書評というジャーナリズムこそ社会と文学とを具体的に結びつけるもの」(丸谷 2)という重大な指摘は、いくら強調しても強調しすぎることはない。

丸谷の『ロンドンで本を読む』の巻頭には、基調エッセイとして「イギリス書評の藝と風格について」という文章が置かれている。その締め括りには次のように書かれている。

わたしとしては、イギリスの書評といふほとんど未紹介の読物のおもしろさを吹聴し、その手法や傾向や心構へにまなぶことはわれわれの、はじまつたばかりの書評文化にとつてずいぶん役に立つはずだと言へば、それでいちおう気がすむのである。(丸谷 11; 下線引用者)

「はじまつたばかりの書評文化」の発展のためには、イギリスの書評文化について、より一層深く掘り下げねばならない。文芸社会学の観点から、イギリスの文壇における書評の意味を分析し、その内実を明らかにすれば、そこには、必ず、大学教授とも、作家とも、またジャーナリストとも異なる、「書評家」という一種独特の、一介の読者でありながら批評精神を備えた人物の存在、そのあり方に生々しい照明が当てることになるだろう。同時に、それはまた書評家の書くものを「純文学」たらしめる英文学の稀有なあり方に、間接的ながら、有効な指針を与えることができるのではないだろうか。

注

- 1) 今なおこの「社交的な精神のあらはれ」という伝統を継承しているのが、1922年創刊のアメリカの月刊誌『リーダーズ・ダイジェスト』であろう。研究社の英和辞典『リーダーズ・プラス』によれば、このポケットサイズの大衆誌は、独自取材の記事もあるが、他の出版物に出たオリジナルの読物や記事を簡潔な形に書き直して編集しており、巻末に毎号話題の単行本を要約した読物が特集されている。英語のほか、世界14か国語で発行され、総発行部数は2800万部で、アメリカでは1953年創刊の『TVガイド』に次ぐ1600万部の規模を誇るという。なお、日本語版は1946年6月から1986年2月まで発行されていたが、残念ながら、それ以降は「無期休刊中」。
- 2) サザランド教授の手に成る一般向けの文学の教則本は、発売と同時にいつも平積みである。さすが名探偵シャーロック・ホームズを生んだお国柄であろうか、「文学探偵サザランド・シリーズ」とでも銘打ちたいような、英文学についての謎解きの一般書がオックスフォード大学出版局からの「ワールズ・クラシックス」からだけでも次の7冊が出版されている。
 - ① *Is Heathcliff a Murderer?: Great Puzzles in Nineteenth-Century Literature* (1996),
 - ② *Who Betrays Elizabeth Bennet?: Further Puzzles in Classic Fiction* (1999),
 - ③ *Henry V, War Criminal? and Other Shakespeare Puzzles* (2000, Cedric Watts と Stephen Orgel との共著),
 - ④ *Can Jane Eyre Be Happy?: More Puzzles in Classic Fiction* (2000),
 - ⑤ *The Literary Detective: 100 Puzzles in Classic Fiction* (2000; Deirdre Le Faye との共著),
 - ⑥ *So You Think You Know Jane Austen?: A Literary Quizbook* (2005),
 - ⑦ *So You Think You Know Thomas Hardy?: A Literary Quizbook* (2005)である。他にも別の出版社から *Where was Rebecca Shot? Curiosities, Puzzles, and Conundrums in Modern Fiction* (Weidenfeld & Nicolson, 1998)がある。そして、この夏のベストセラーが *How to Read a Novel: A User's Guide* (Profile Books, 2006)である。このように立て続けにヒット商品を飛ばす、驚異の英文学研究者を目の当たりにすると、文学は文化に、活字は映像に取って替わられた、と

思い込んでいるのはひょっとしたら日本人だけの現象ではないだろうか、そんな不安に襲われる。文学は、今、他のメディアと共働して、かつて例のないほどに活力をみなぎらせている。サザランド教授の去年の収穫「現代のディケンズ愛好家のためのガイド」という副題を持つ小説案内、*Inside Bleak House: A Guide for the Modern Dickensian* (Duckworth, 2005) は、ディケンズのみならず小説愛好家の必読書であろう。

Works Cited

- Carey, John. *Pure Pleasure: A Guide to the Twentieth Century's Most Enjoyable Books*. London: Faber and Faber, 2000.
- Cunningham, Valentine. "Reviewing the review." *The English Review*, Issue 8, Number 2 (Nov. 1997): 34-37.
- Eliot, George. [unsigned review] "Robert Browning's *Men and Women*." *The Westminster Review*, LXV (Jan. 1856): 290-96.
- Forster, John. *The Life of Oliver Goldsmith*. 3rd ed. 1848, 1855. London: Hutchinson, 1903.
- Goldsmith, Oliver. "Letter 51: A bookseller's visit to the Chinese." *The Citizen of the World*. Ed. Richard Garnett. The Reynard Library. London: Rupert Hart-Davis, 1967, p. 388.
- . *An Inquiry into the Present State of Polite Learning in Europe* (1759). *Goldsmith: Selected Works*. Ed. Richard Garnett. The Reynard Library. London: Rupert Hart-Davis, 1967, pp. 207-223.
- Gross, John J. *The Rise and Fall of the Man of Letters: Aspects of English Literary Life Since 1800*. 1969. Chicago: Ivan R Dee, 1992.
- Hallam, Arthur Henry. [unsigned review] "Poems, Chiefly Lyrical." *Englishman's Magazine*, I (August 1831): 616-28
- Leavis, F. R. "The Literary Racket." *Scrutiny*, Vol. 1, No. 2 (Sept. 1932): 166-168.
- . "Note: 'Being an Artist'." D. H. Lawrence, *Novelist*. London: Chatto & Windus, 1955, pp. 297-302.
- Leavis, Q. D. *Fiction and the Reading Public*. London: Chatto & Windus, 1932.
- Lodge, David. *The Art of Fiction: Illustrated from Classic and Modern Texts*. Penguin Books, 1992.
- MacNichol, Kenneth. *Twelve Lectures on the Technique of Fiction Writing*. London: Albion, 1930, 1951.
- Miller, Lucasta. "Relative values." *The Guardian* (4 June, 2005)
- Mullan, John. *How Novels Work*. London: OUP, 2006.
- Orwell, George. "Confessions of a Book Reviewer." (1946) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell, Vol. 4*. Secker and Warburg, 1968.
- Padel, Ruth. *52 Ways of Looking at a Poem: A Poem for Every Week of the Year*. 2002. Vintage, 2004.
- Rossetti, William Michael. "Arthur Hugh Clough's *The Bothie of Tober-na-Vuolich*." *The Germ*, I (Jan. 1850): 34-46.
- Sutherland, John. *How to Read a Novel: A User's Guide*. Profile Books, 2006.
- Taylor, D. J. "Critical, but stable." *The Guardian* (17 May, 2006)
- . "Beware going by the book." *The Guardian* (4 October, 2006)
- The Times*, "Review of *The Times*." *The History of the Times, II. The Tradition Established, 1841-84*. London: The Times, 1939, pp. 467-91.
- Waller, Philip. "Reviews and Reviewers." *Writers, Readers and Reputations: Literary life in Britain 1870-1918*. London: OUP, 2006, 116-74.
- Waugh, Evelyn. "Mr Waugh Replies." *The Essays, Articles and Reviews of Evelyn Waugh*. Ed. Donat Gallagher. Penguin Books, 1986, 440-443.
- Woolf, Leonard. "Note." Woolf, Virginia. 215-17.

- Woolf, Virginia. *Reviewing*. [Hogarth Sixpenny Pamphlets, No.4. London: Hogarth Press, 1939] *Collected Essays. Volume 2*, Hogarth Press, 1966, pp. 204-15.
- 平井正穂. 「イギリスの批評 — 創作と批評の流れ」『世界文学大系96 文学論集』東京：筑摩書房, 1965, 490-492.
- 丸谷オ一. 『ロンドンで本を読む』東京：マガジンハウス, 2001.
- 篠田一士. 「旅行記について」『現代イギリス文学』東京：垂水書房, 1962, 25-47.
- . 「イギリス批評の現状」『現代イギリス文学』東京：垂水書房, 1962, 73-119.
- . 「T. L. S. その他」『読書三昧』東京：晶文社, 1983, 17-24.
- 矢倉尚子. 「訳者あとがき」『ジェイン・オースティンの読書会』東京：白水社, 2006, 349-353.